



マイナス18℃の施設の中で保管



保冷倉庫の従業員とブラジル北海道協会大沼宣信(のり)のぶ)副会長

新聞社やテレビ局の取材に応じる



真保局長が台座に上がって自ら“陣頭指揮”



雪ダルマ完成に喜びの握手



不安そうに見つめる一瞬

ブラジルに巨大雪ダルマ

巨大雪ダルマの設営は、当初の予定時刻を早めて行われました。テレビのカメラマンもスタンバイOK。フォークルフトからゆっくり下ろされるコンテナのようすを周囲の

人たちが静かに見守り、留めねじがはずされ白い雪の塊りが現れました。

胴体の上にクレーン車で慎重に頭部を乗せていきます。日本語をヒグマ会の人やポルトガル語に訳し、操作している作業員に伝えました。

初めは静観していた真保局長も自ら台座に上り細かく指示。ブラジル滞在中に見せた真剣で一番生き生きした表情でした。

黒い目玉と真っ赤な鼻と口をつけ形を整え、最後にヒグマ会の仲間が作ったマフラをつけて完成。関係者はもちろん見学に来ていた人からも歓声が上がりました。言葉の壁を越えた感激の一瞬でした。

木枠に入れ保冷用コンテナを使って安平町から約60時間かけて空輸された胴体と頭部が合体し一つの巨大雪ダルマに変身。高さ2メートル、幅1・4メートル、重量1・3トンの勇姿を披露しました。

雪を見たことがないブラジル生まれの子どもや、何十年ぶりの雪の感触を楽しみに来た老夫婦などが開幕を待っていました。